

スタンダールと国家

——『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』から——

下 川 茂

序

近代主義者、進歩主義者、文明開化主義者としてのスタンダールは、フランス革命によって近代化、国民化されたフランス国家とフランス社会のあり方を基本的に支持し、ナポレオン没落後のフランスを始めとする大陸諸国の文明化の停滞と後退を厳しく批判した。しかしその一方で、革命が生み出した社会に対して極めて大きな違和感を彼は感じていた。冷たく、合理的で、金銭的利害と虚栄心が何より優先する社会、これがスタンダールが抱いた革命後のフランスの像であり、このような社会に生涯慣れることができなかった。また、国民国家へと転成しつつあったヨーロッパ各国の国民は、いずれも過剰な自己意識にとらわれ、相互に反目しあっていたが、これもスタンダールの批判的となった。「控室の愛国心¹⁾」という言葉を使って、盲目的な愛国心を彼はたびたび槍玉に挙げている。様々な地域の人々や文物が登場する旅行記において、とりわけショーヴィニズム批判は頻出する。批判の矛先は、フランスはもとより、近代化の先進国イギリスやアメリカ、さらに統一国家以前の段階にあったイタリアやドイツにも向けられた。

しかし、「控室の愛国心」批判は、愛国心そのものの批判でも、国家そのものの批判でもない。さらに、革命後のフランス社会に対する違和感の根源に何があるかも問題である。私には、それは、革命以前の時代を懐古する、極めて後ろ向きの感性であるように思われる。

国家に対するスタンダールの重層的な態度の一端を、ここでは彼の最初の旅行記『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』を中心に探してみたい。

1817年刊行のこの旅行記は、大幅に改定増補された新版が1827年に出ている。しかし、二つの版の間に重要な思想的変化はないので、本稿では適宜両版を使用する。以下初版を『1817年』と略記し、新版は、表紙に1826年と印刷されているため1826年版と称されているので、『1826年』と略記する。また、1818年に、スタンダールは一連のイタリアに関する未完の断片を書き残しており、『1818年のイタリア』としてプレイアード版『イタリア旅行記』に収録されている。これも資料として取上げ、以下『1818年』と略記する。さらに、論旨の都合上、スタンダールの他の作品にも言及する。

1 「控室の愛国心」

まず、「控室の愛国心」という言葉をスタンダール自ら解説している箇所をみよう。

1763年頃、『カレー攻囲』が、実に馬鹿げた、また実に国民的な成功を博したことをご存知だろう。詩人のド・ペロワは、後に他の人に利用された、同国人に諂うという金になる考えを抱いた。ある日この悲劇を嘲笑したデイヤン公爵に、ルイ15世が「では、君は良きフランス人〔ボン・フランセ〕ではないのか」と言うと、「殿下、この悲劇の詩句がわたくしと同じくらい良きフランス語〔ボン・フランス〕であればよいのですが！」と公爵は答えた。

自分の国を愛し、諂いのなかにベテン師と馬鹿の取引しか認めなかった賢明なテュルゴは、ド・ペロワ殿の卑しいお世辞を称賛するお人よしたちの熱狂を、**控室の愛国心**と名づけた（『1826年』、406—407）。

「自分の国を愛し」た「賢明なテュルゴ」という表現から、「**控室の愛国心**」がテュルゴの祖国愛と区別されていることが分かる。『恋愛論』序文にスタンダールが引用したルイ・シモンの言葉を使えば、それは「**自国に対する盲目的で排他的な偏愛²⁾**」である。

次に、一見国家そのものが批判されているかのように見える例を取上げる。

美しい女性が自分の**肖像画**に**黒色**が置かれているのを見ると、怒って画家の手を止める。しかし、影は自然の中に存在するものであり、影がなければ輝かしい部分もない。宮廷という諂いだけの平板な場所ではすべてがくすんでいるのはそのためだ。全体として見れば、諸国家は、美しい、あるいは愛すべき点のあるきれいな女性のようなものだ。国家ほど愚かなものはないと言える。なぜなら、才知ある人々はこの種の係争の弁護を引き受けることはなく、何も言うべきことをもたぬ馬鹿者が、**国の名誉**とか**民族の性格**に対する**侵害**といった下らぬ告発を引き受けるからだ。馬鹿者たちは、自分たちが大多数を構成しているので、揺るがぬ権利をおもちというわけだ。20年来ヨーロッパの諸国家は、互いに深刻な紛争を抱えていないので、それぞれの国の評判は、当然個人の言動に左右される。（……）それゆえ、ドイツ、イタリアの馬鹿な方々には、このパンフレットの初版で、いささか非難めいたことを申し上げてその感情を害したことを、平にお許し願いたいと申し上げる（『1818年』、243—244）。

「国家ほど愚かなものはないと言える」という言葉は、それだけ取り出せば確かに過激な国家否定の言葉のように見える。しかし、文脈を考慮すると、ここでも、批判されているのは、自国の欠点を直視できない愚かで盲目的な排外主義、すなわち「**控室の愛国心**」である。誇張された、誤解を招きやすい物言いが、スタンダールは国家そのものを否定しているわけではない。ここで批判されているのはドイツとイタリアだが、フランスに関する箇所をみてみよう。

これほどわが国の音楽の貧弱さ、潤いのなさ、もったいぶった力の無さを感じたことはない。そこには、かつて私を感動させた、最も快いとされているメロディーが集められていたのだが。真の美の感情は青春時代の思い出にも打ち勝つ。ここで私が言っていることは、真の美を見たことがない人々には、不合理の、いやおそらく忌まわしきの極みだろう。しかし、真の愛国者は、とうの昔に、この本を火に投げ込み、著者はフランス人ではない、と叫んだに違いない（『1826年』、525）。

ここでも、文脈を考慮すれば、フランス音楽に対する批判を受けつけない「真の愛国者」の「真の」が反語であり、「控室の愛国心」が問題にされていることは明らかである。反語や誇張的表現はスタンダールが好んで多用した表現技法であり、文脈を無視して解釈すれば彼の真意を歪めることになる。彼は自分こそ真の愛国者だと思っていた筈である。ただ、『1817年』では、出版時の政治情勢から、自身の愛国心を前面に押し出すわけにはいかず、反語を使ったり、次のようにイタリアに仮託して暗示するしかなかった。

ガッリは第一幕で「祖国は常に無事だろう」と歌う。観客は熱狂して喝采し、私の目には涙が浮かぶ（『1817年』、135）。

（……）メルツイの胸像の前に私は立ち止まり、イタリアに対する愛情と、祖国愛と、芸術に対する愛に夢中になって、急いで我々の会話の要約を書き留めた（『1817年』、139）。

スタンダールの愛国心については、『アンリ・ブリュラーの生涯』や『ナポレオンについての覚書』の記述から、若年時の共和主義的愛国心がよく知られているが、フランス旅行記から、晩年の彼の愛国心の姿をみておこう。

商用でニヴェルネ地方の製鉄所地帯からショーモン郊外の工場地帯まで、急いでやってきた。この地方は鉄を豊かに産出する。しかしひどく汚らわしいので、話題にしないでおきたいところだ。話せば、悪いフランス人にされてしまうだろう。ナポレオンがこの言葉に与えた滑稽な意味では、確かに私は非難されても仕方がない。私はフランスに劣った点があることを認める。外国から攻撃されたら、腹を立てて祖国を守るだろうと思うが、それでも、パリの才人より、グラナダやケーニヒスベルクの才人の方が好きだ。パリの才人が何を言おうと、だいたい見当がついてしまう。意外性というやつ、あの何物にもまさる意外性は、異国の才人になら見つかる。

私にはイギリス流の愛国心はひとかけらもない。なにしろあの連中はロンドンの郊外町の一つをいっそう繁栄させるためとあらば、ベルギーの町を全部焼き払うことも辞さないらしいのだ。

（……）

寄り合いが今晚某夫人宅である、と今朝教えられた。この寄り合いでは、フランス防衛戦争当時の1814年に、ショーモンを占領した同盟国軍の野蛮な態度が大いに話題になった。ま

まったくあの連中はわれわれほど文明化していない。（……）

ストラズブルからブザンソンを経てグルノーブルに至る東の国境は、このうえなく気高い祖国愛により、他と区別される。³⁾

相変わらず、フランスの、あるいはイギリスの極端に利己的で偏狭な愛国心、すなわち「控室の愛国心」が批判的になっている。しかし、スタンダールは、フランスの鉱工業地帯の醜さを指摘し、パリの才人を貶しつつ、「外国から攻撃されたら、腹を立てて祖国を守るだろうと思う」と、祖国の防衛が問題になれば、自分も戦争に参加することを当然のこととしている。「控室の愛国心」と、戦時、特に国土防衛戦における「この上なく気高い祖国愛」とは明確に区別されている。「気高い祖国愛」の東部国境地帯に彼の郷里グルノーブルが含まれていることも注目に値する。グルノーブルの「賢明な愛国心」は同じ旅行記の別の箇所でも取上げられている。⁴⁾

スタンダールは、内政問題の解決のために政府が戦争を起こし、戦争遂行のために愛国心が鼓吹されることを指摘しており、愛国心の政府による悪用の危険を認めている。⁵⁾しかし、悪用されるからといって愛国心が不要になるわけではない。外国からの侵略の危険は常に存在する。彼は、プロシア、ロシア、⁶⁾イギリスとの戦争の可能性を考え、国土防衛について思いをめぐらせる。

ラングルの城壁が完成されているのを見て、私は大いに喜んだ。戦争が起こったら、この土地の律義な人たちは、自分たちの町を責任をもって守ることだろう。数名の砲兵を要求するだけだろう。1814年の残虐行為と略奪の記憶は今なお生々しい。⁸⁾

「賢明な愛国」者スタンダールは、国家の対外関係について、すでに『1817年』において、極めて現実的な立場を取っている。

私と一緒にいる若い士官たちはフランス人が彼らに自由を与えなかったことを辛辣に非難する。しかし、それは主人の利害と一致したのだろうか。国家は相互間では個人と同じだ。いつから、これという理由もなく人が他人に儲けさせるようになったのか。望みうる最善のことは、利害を一致させることだ（『1817年』、143）。

スタンダールは他国に無償の援助を求めるイタリアの「若い士官たち」の非現実的な要求を批判しているが、ここで彼は近代的合理主義者の顔を見せている。「いつから、これという理由もなく人が他人に儲けさせるようになったのか。望みうる最善のことは、利害を一致させることだ」という主張は、反近代主義者としての彼が反撥し嫌悪した、利害に敏感な合理主義的な発想に基づいている。『1817年』でもう一つ注目すべきは、国家の警察機能に関する彼の認識である。フランス統治時代のイタリアの治安の良さの原因の一つとして、イタリア人の口を借りて、彼は刑罰の厳しさを挙げている。

1802年にナポレオンは千人を処刑して一万人の殺人を防止し、ピエモンテを文明化しました。ルイジアナの、情熱のない、理屈っぽく、粘液質の人々のところなら、死刑を廃止す

る可能性がないとは申しません。イタリアでは、ミラノを除いて、死刑があらゆる文明の前触れです。馬鹿なドイツ人たちは私たちが統治しようと試みていますが、彼らは殺人者が自白しない限り処刑しません（『1826年』、365）。

ここでも、近代化、文明化を推進しようとする近代主義者スタンダールが前面に出ている。

フランスの治安問題もスタンダールは取上げており、そこでも再犯者に対する厳しい方策を提案している⁹⁾。さらに、近代化の先進国フランスには、工業化が生み出した労働者の貧困や公害問題など、近代化のマイナス面が存在するが、近代主義者スタンダールは、それらの問題に、累進税¹⁰⁾や工場の立地規制¹¹⁾、不安定な産業の抑制¹²⁾、さらには貧困者の結婚の規制¹³⁾によって対処しようとする。これらの対策は、すべて、社会生活に対する国家の介入を意味し、国家の存在が前提とされている。近代主義者スタンダールにとって、国家と政府は必要不可欠なものである。

では、反近代主義者スタンダールにとって、それらはどのような意味をもつのだろうか。

2 旧体制ノスタルジー

スタンダールによれば、イタリアでは、政治的自由を目指した中世共和都市が安定した制度を見出すことができず自壊した後（『1826年』、468、471）、僭主と外国による支配が続き、フランスのような絶対王政による中央集権国家が成立しなかった。そのため個性と自由を尊び、他人の目を気にしない、情熱的な気風をイタリア人は持ち続けた。「情熱は沢山もっているこの民族は、一人のルイ14世ももったことがなく、それだけいかに自然に近いか（……）」（『1817年』、128—129）。「ここでは人々は自分たちが幸福かどうかを考えて暮らしていない。自分が好きか好きでないかがすべてを決める。本当の祖国は自分に似ている人に一番多く出会う国だ。フランスではどんな社交界でも、いつも冷ややかな調子に出会うのではないかと心配だ」（『1817年』、98）。「フランスは滑稽と一大都市の専制によって独自性がない。ここでは、ミラノから二十里のプレシアは、フィラデルフィアを真似ようと思わないようにミラノを真似ようとは思わない。すべての家庭、すべての情事は、町から町へとつつぬけである。しかし、模倣はまったくくない」（『1817年』、149）。その他、フランスには存在しない、偽善者ではない大臣（『1817年』、25）、自然な方言（『1817年』、30）、虚栄より情熱を大事にし、芝居の初日に金を惜しまない人々（『1817年』、30）、予想外で自然な事件に満ちたギータの物語（『1817年』、37）等々。しかし、僭主と外国支配は、イタリア人のエネルギー的な性格に歪みと停滞をもたらし、偏狭な地域主義や無知や迷信が蔓延り、治安は悪化した。「どこでも見られる相互の反目はイタリアの都市の著しい特徴で、中世の専制政治の結果であり、自由への重大な障害である。それは都市の独自性を相殺している。フランスにはパリしかなく、パリが良いところを独り占めしている」（『1817年』、113）。そのようなイタリアを覚醒させたのがナポレオンであり、イタリアの文明化、近代化、国民国家化にフランスは大きく貢献した。「マレンゴの戦いは彼らの祖国の文明を1世紀進めたが、もう一つの戦いがその文明を1世紀にわたって停滞させる」（『1817年』、83）。しかし、地域的分裂、中央集権の欠如こそが、その日その日の快樂に忠実な、自然で、個性豊かなイタリアの習俗の保存を可能にしたものだった

たから、文明化はイタリアにその貴重な特質を失わせる危険がある。スタンダールを魅了したイタリアの南国的な自然は変わらないが（『1817年』、82、95）、人々の「行き渡った善良さ、自然さ」（『1817年』、97）は消滅する可能性がある。古い地域主義的「控室の愛国心」はナポレオンによって弱まったが（『1826年』、409）、フランスが呼び覚ました国民国家的祖国の観念は強化された。

大使の***氏は昨日私にこの民衆がどれほど熱烈に祖国という言葉に喝采するかを指摘した。このジャコバン的感情は、おそらくアルフィエリとフランス人に由来する。我々はイタリア中で熱愛されている。民衆は憎しみによってしか愛さない（『1817年』、27）。

イタリアの国民国家化はナポレオンの没落で一時的に中断したが、その過程は確実に始まっている。イタリア統一以前にこの世を去ったスタンダールは、イタリアがその愛すべき特質を本格的に失っていく事態を見ないですんだが、その兆候には気づいていた。独立と統一をめざすイタリア人は政治的になり、すでに現在の幸福を楽しむことを忘れていた。

1770年にそうであったように、政治の話なんかしない、ひっそりとしたところがあったら、アルミダの園ほど遠いところでも、私は飛んで行くだろう。若い女性と軍人だけの私たちのグループは、政治の方を向いた。つまり、笑ったり、われわれの命の盛りの日々を楽しむ代わりに、腹を立てる楽しみをもった（『1817年』、88）。

現在の幸福を楽しむ生き方は、近代化、国民化の時代に適合しない。スタンダールはフランス支配時代のミラノの文明化を高く評価するが、その一方で、それ以前のオーストリア支配時代のミラノを次のように描いている。

世界で最も裕福なこの国の首都は、10万リーヴルの年収のある家は400を数え、100万リーヴルの家は20を数えた。彼らは自分たちの富をどう使ったらよいか分からなかった。（……）いかなる国の金持ちもこれ以上楽しい生活を送ったことはない。あらゆる悪意ある情熱は排除され、ほとんど虚栄心はなく、また当時貴族は気の良い人々だったので、民衆は彼らの幸福を共有していた。（……）ロンバルディアのどの小作地も、米、チーズ、絹を産出し、それらは高額で売れた。それらに、わが国の小作地が産出するすべての生産物が加わる。ここは破産のない国であり、すべてがただ同然である。この逸乐的な静けさは、5月14日の雷鳴が精神を目覚めさせたとき、無気力に墮し始めていた。穏やかなミラノ人は、日本のことを考えたことがないのと同じように、フランスのことなど念頭になかった（『1817年』、141）。

1796年5月14日のナポレオンのミラノ入城の時点で、ミラノの「逸乐的な静けさ」は「無気力に墮し始めていた」とされ、このあと、フランス支配時代の文明の進歩が、道路の整備や工場の増加等を例として語られるのだが、ここに描かれているオーストリア統治時代のミラノは、まるで、アダムとイヴの墮罪以前のエデンの園を思わせる。「悪意ある情熱」も「虚栄心」もなく、「すべてがただ同然」の国！フランスの旧体制についても、1775年のフランス社交界の幸福が、イギリ

ス人大佐フォーサイトの口から語られている。そこでも、「結論」では、「(……)しかし、このような社交界の最も上流の方々は、あなたが思われるほど幸福ではないように思われたと断言できます。娯楽は幸福ではありません。もし人がアイスクリームとビスケットだけで生きて行かなければならないとしたら、惨めな生活です。心からの関心や興味が常に欠けていました(……)」（『1817年』）(109)とされ、フランスの政治的自由の欠如がイギリスと比べて批判されている。しかし、革命以前のフランス社交界が次のように描かれるとき、1796年以前のミラノの幸福と同じように、旧体制の幸福がノスタルジックに回想されている。

あなた方フランス人が天から授かった極度の陽気さとは別に、あなた方の社交界は、イギリスにおける我々の社交界とは三つの状況によって違っていました。生まれの卑しい人々の排除、女子教育の洗練と女子の才知の育成、仕事がなく、政治的反感が存在しないこと。以上の第一番目の状況の結果として、私の青春時代のパリの社交界は、かつてイギリスにあったことのない優雅さと、ゆとりと自然さをもっていました。ブルジョワをすべて排除していたことが、おそらく生活の卑俗なものすべてが遠ざけられていた理由です。そして、そのことには別の利点もありました。相互の嫉妬と侮蔑の感情、家柄の傲慢と仕事によって蓄積された富のあいだの絶えざる戦争状態を不可能にしていたのです。今日では、この戦争状態から生じる結果は、控えめな態度と沈黙によってしか回避できません。(……)イギリスでは(……)金力の傲慢、家柄の傲慢、挙措振舞いの傲慢が、絶えず挑発し合っていました。(……)ブオナパルテ支配下のあなた方の社交界でも、そうしたことがありました。(……)私がフランスに来たとき、フランス人たちは、自由な政府の欠如に対する埋め合わせを彼らの社交界の快適さに見いだしていました。私はヴェネツィアでも同じ印象を受けました(……)立憲主義的になるにつれ、あなた方の女性たちは愛想がなくなるでしょう。私はすでにその気配を感じていたとさえ思います。今あなた方は1775年よりずっと多くの家庭の良き母をお持ちです。そして、家庭の良き母ほどうんざりさせる存在はありません（『1817年』）(103-107)。

ここで触れられているヴェネツィアは次のように描かれている。

ヴェネツィアはおそらく1740年から1796年まで、世界で最も幸福な都市であり、封建的な、あるいは迷信的な愚行が最も少ない都市だった。そのような愚行は今日でも、ヨーロッパの残りの部分と北アメリカを陰鬱にしている。(……)ヴェネツィアは幸福だった。しかし、個人間の訴訟に関する裁判はお粗末で、刑事裁判は無だった（『1826年』, 328）。

このように、ヴェネツィア共和国の寡頭制、ミラノの外国支配、フランスの絶対王政とその形態は様々だが、近代的な国民国家以前の政治体制のもとでの幸福に対して、『1817年』のスタンダードは強いノスタルジーを抱いている。もちろん、旧体制の復活は論外である。

この政府は当時は快適なものだったが、今日では耐えがたいものだろう。ナポレオンがこ

の楽しい政府を破壊しなかったとしても、時の流れが破壊していただろう。ヴェネツィア政府は今日だったらベルンのそれ以上に悪いものだろう。だから、その崩壊を諦めて受け入れよう（『1818年』、193）。

スタンダールは復古主義者ではない。彼にとって、近代化、文明化、国民化は、プラスとマイナスの両面をもつ、止めることのできぬ時の流れ、否定することのできない現実だった。近代のプラス面に惹かれる近代主義者スタンダールは、近代化に対する反動を批判しないではいられない。しかし、彼の中の反近代主義者は、近代のマイナス面を激しく嫌悪し、革命前の旧体制のプラス面を懐古しないではいられない。旧体制ノスタルジーの背後には、ブルジョワに対する反感と貴族主義がある。

銀行家のRがある日私に言った。「あなたには貴族的な要素がありますね」。そんなものとは無縁だと断言したいところだった。実際には自分にこの病気をみつけた。自分を矯正しようとしたりしていたら欺瞞的になるところだった。私は喜んでこの病気に身をゆだねる（『1826年』、508）。

ブルジョワ嫌悪については、パリ生活を体験したイタリア人に彼は語らせる。

たくさんのお金持ちの銀行家がいる、彼らも一種の上流階級ですが、一般に金の話しかしませんし、あなた方が6千フランで生活することを許さないでしょう。（……）産業はフランス人を労働へと向かわせ、彼らは仕事に喜びを見だし、幸せです。貴族政治は逆に彼らをひどく同情すべき人間にすることでしょう。しかし、私は、銀行家より、ときどき十字軍のことを話す人々と暮らしたい（『1826年』、464—465）。

このような反近代主義者スタンダールにとって、国家と政府の存在はどのような意味をもつのだろうか。

ヴェネツィア、ミラノ、フランスの旧体制の幸福を彼がどのように描いていたかを思い出してみよう。旧体制は、政治的自由とそれを支える言論・出版の自由を制限する代わりに、私的自由と物質的な豊かさ、そして洗練された社交を住民に保証していた。政治的自由がないからこそ、階級間の激しい軋轢や葛藤が存在せず、人々は嫉妬や羨望に駆られることなく、陽気に暮らすことができた。このような社会は自然状態とは全く異なるものであり、政治的自由を制限し、身分制を維持する政府なしには存在し得ない。反近代主義者スタンダールにとっても、国家と政府の存在は必要不可欠なものだった。

イタリアの自然を賛美し、ときには、文明とは正反対の自然状態を理想とする記述をスタンダールは残している。

二年前から苦しめられている野心の暗い悲しみに取り付かれたのを感じる。東洋人風に肉体に働きかける必要がある。船に乗り、四時間航海し、イスキア島に着く。ドン・フェルナ

ンドへの紹介状がある。

彼は、1806年にイスキアに引きこもり、大嫌いなフランス人の侵略以来ナポリを見ていないと私に語る。劇場がないのを慰めるため、見事な鳥小屋にたくさんの夜鳴き鶯を飼っている。(……)ほとんど文明のしるしはない。この光景と海の動きが私を良識へと連れ戻してくれる(『1817年』, 48-49)。

この反文明=自然状態の理想化は、スタンダールの人間観、社会観の根底にある重要なテーマの一つであり、『1818年』に収められた断片『海辺にて』でも展開されている(275-278)。しかし、貴族主義者スタンダールが旧体制を懐古するとき、この自然状態の理想化はすでに遠ざけられている。イタリアの自然な習俗も、南国の自然という風土を別にすれば、中世共和国時代の、あるいはさらに古くエトルリアの諸共和国の習俗を起源としており(『1826年』, 497, 508)、国家の存在を前提としている。イスキアの住民に「ほとんど文明のしるしはない」としても、フランス嫌いのドン・フェルナンドは旧体制のナポリの支配者の一人であろう。

貴族出身でもなく、また、1789年のバスティーユ陥落時に6歳でしかなかったスタンダールが、なぜ、どのように旧体制にノスタルジーを抱くにいったか、近代主義者と反近代主義者は彼の中でどのように共存していたのか、これらの問いには稿を改めて答えることにしたい¹⁴⁾。ここでは、最後に、晩年のスタンダールが抱いた、矛盾する二つの面の和解のヴィジョンをみておくことにする。

ブロス裁判長が書いていた時代、すわなち1739年という年を、私は愛惜すべきだろうか？(……) 1739年頃には陽気さがあつた。貴族は恐れをもたず、第三身分はまだ自分の鉄鎖、というよりむしろ自分の不利に憤慨することを思いつかず、生活はフランスで穏やかに流れていた。我々の心を焦がす野心も羨望も恐るべき貧困も、そのころはありえなかった。(……) 一切を考え、また歴史を研究してみて、私は1650年頃のヴェネツィア貴族に生まれなかった。しかし、誰が事物の歩みを止められよう。(……) 1739年のかくも魅力的な生活の全体は、他日アルプスの彼方、あるいは我々の間に再生しうるか？ わが国のそのような革命の後で、人は陽気さと良き趣味に復帰するであろうか？(……) 陰鬱なアメリカほど我々の立場に近いものはない。アメリカのみが我々の未来をいくらか明らかにしてくれる。(……) アメリカでは、卑俗で凡庸な人間たちが専制君主であり、彼らに媚びなければ街頭で侮辱される。ラ・フォンテーヌもニューヨークでは「私は無知な大衆が大嫌いだ！」とは言えまい。(……) ニューヨークでは、気に入ってもらわねばならぬ相手は、私の靴屋や、その従弟で子供が10人いる染物屋であり、しかも滑稽極まることに、この靴屋がメソジスト派で、染物屋は再洗礼派なのだ。しかし、こうした恐るべき言葉を前にして、陽気さへの復帰の可能性という少々不確かな仮定が許されるとして、フランスの情勢は周囲のすべての国と大いに異なっている。

我々の天然痘は峠を越えた。もはや93年は不可能である。なぜならもはや非道な悪弊は無く、またそれを悪用するコロ・デルボワの輩や下層階級のならず者たちは見あたらぬ。彼らはデュ・バリール夫人とリシュリユー元帥の腐敗した王政の産物だった。狂気の沙汰はあり

えるが、もはや残虐行為を恐れる必要はない。わが国の最も狂信的な共和主義者でも靴屋のシモンよりましではないだろうか。（……）フランスは最初に病から治るだろう。ポワトゥ男爵の輩がプロス裁判長の手紙を味わうのは、まずフランスにおいてであろう。¹⁵⁾

アメリカ化は避けられないとしても、フランスがアメリカの新教徒的陰鬱さと大衆デモクラシーの愚昧さを克服し、旧体制の陽気さを取り戻すことをスタンダールは願っている。「不確かな仮定」という条件付だが、ともあれこれが、最も楽観的なときに彼が夢見た未来のフランスの姿だった。ここでも、自然状態や国家の解体が問題外であることは言うまでもない。

注

- 1) Stendhal, *Rome, Naples et Florence en 1817*, dans *Voyages en Italie*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1973, p. 43. 以下、『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』（1817年版、1826年版）、『1818年のイタリア』についてはこの版を使用し、本文中に頁字数を記す。
- 2) Stendhal, *De l'Amour*, éd. H. Martineau, Garnier Frères, Classiques Garnier, 1959, p. 3.
- 3) Stendhal, *Mémoires d'un touriste*, dans *Voyages en France*, Gallimard, Pléiade, 1992, pp. 46-47.
- 4) *Ibid.*, p. 52.
- 5) *Ibid.*, pp. 125-126, 138.
- 6) *Ibid.*, p. 9.
- 7) *Ibid.*, p. 18.
- 8) *Ibid.*, p. 55.
- 9) *Ibid.*, pp. 230-231.
- 10) *Ibid.*, pp. 229-230.
- 11) *Ibid.*, p. 466.
- 12) *Ibid.*, p. 81.
- 13) *Ibid.*, p. 121.
- 14) スタンダールの旧体制ノスタルジーについては、*Stendhal et son penchant aristocratique: la nostalgie d'un monde jamais révolu* と題して、*L'Année Stendhal numéro 5* に発表予定。
- 15) Stendhal, *La comédie est impossible en 1836*, dans *Mélanges*, t. II, *Œuvres complètes*, Genève, Cercle du Bibliophile, 1970, t. XLVI, pp. 265-278.

（Shigeru Shimokawa, 本学文学部教授）